

作品ID	巻	内容	所有	出版社
60	御宿かわせみ	「初春の客」「かわせみ」に黒人らしい男を連れた若い娘が来ます。東吾は、源三郎から向島の寮で女中が黒い犬を連れて逃げたと言う話を聞きました。「花冷え」「花冷え」「卯の花匂う」「秋の螢」「蔵の中」「師走の客」「江戸は雪」「玉屋の紅」		文春文庫
61	江戸の子守唄 御宿かわせみ2	「江戸の子守唄」東吾に縁談が起こり、るいは「かわせみ」に置き去りにされた幼女の世話をすることで気を紛らわそうとします。 麻生七重が登場します。「お役者松」「迷子石」「幼なじみ」「宵節句」「ほととぎす啼く」「七		文春文庫
62	水郷から来た女 御宿かわせみ3	「水郷から来た女」商家の子供の誘拐が頻発する中、小田ひろという女剣士が道場を荒らしまわっていました。ひろは、姉の駆け落ち相手を探して鹿島からやって来たのでした。		文春文庫
63	山茶花は見た 御宿かわせみ4	「山茶花は見た」回船問屋の万石屋に押し入り、捕らえられた盗賊・七化けの太郎次一味が、島抜けして戻って来ました。盗賊たちを目撃したのは乳母の娘・おきくでしたが…。		文春文庫
64	幽霊殺し 御宿かわせみ5	「幽霊殺し」「かわせみ」で、病後の源三郎の快気祝をしているとき、幽霊が殺された、という話が出ます。内儀の幽霊が主人に無心をしたのですが、おかしいと思った主人が障子越しに脇差を突くと、女中のおきくだったそうです。		文春文庫
65	狐の嫁入り 御宿かわせみ6	「狐の嫁入り」亀戸村あたりで、しばしば狐火が出ます。東吾と源三郎は調べに乗り出します		文春文庫
66	酸漿は殺しの口笛 御宿かわせみ7	「酸漿は殺しの口笛」酸漿を鳴らしながら葛西舟に乗っていた娘が、家を出た母によく似た女を見たといいます。江嶋屋の忠三郎が登場します。		文春文庫
67	白萩屋敷の月 御宿かわせみ8	「白萩屋敷の月」東吾は通之進の使いで、根岸の白萩屋敷に住む青江但馬の後室を訪ねます。後室の香月は大変美しい女性でしたが、顔の右半分に火傷の跡がありました。		文春文庫
68	一両二分の女 御宿かわせみ9	「一両二分の女」「かわせみ」に来るはずの客が、予定を過ぎても姿を見せません。安困いの女と馴染みになっているそうですが…。		文春文庫

69	閻魔まいり 御宿 かわせみ10	「閻魔まいり」浅草寺境内の閻魔堂で、湊屋仁左衛門の姪のお民が晴れ着を切られました。お民は、仁左衛門の娘のお駒と間違えられたのでは、と言	文春文庫
70	二十六夜待の殺人 御宿 かわせみ11	「二十六夜待の殺人」俳諧の同好の士と一緒に新長谷寺の愛染明王の御堂へ来ていた表具師の今井有斎の死体が発見されました。死体の側には、意味不明の書き付けがありま	文春文庫
71	夜鴉おきん 御宿 かわせみ12	「夜鴉おきん」このところ、江戸では盗賊の跳梁が目立ちます。盗賊に入られた商家では、必ず小僧か手代か、一人だけが惨殺されていました。	文春文庫
72	鬼の面 御宿 かわせみ13	「鬼の面」立春早々、日本橋馬喰町の麻苧問屋の信濃屋の主人の吉三郎が殺されました。信濃屋の元の主人で、「かわせみ」に泊まっていた和助に疑いがかかります。	文春文庫
73	神かくし 御宿 かわせみ14	「神かくし」嘉助は、様子のおかしい若い娘に声をかけます。娘は、数日間の記憶がなく、まるで神かくしにあったかのようです。それから、神田界隈で神かくしが頻発します。	文春文庫
74	恋文心中 御宿 かわせみ15	「恋文心中」東吾は、講武所教授方として勤めるようになりました。そして、軍艦操練所にも行くようになります。そこで知り合った坪内文二郎から、東吾は相談を持ちかけられます。	文春文庫
75	八丁堀の湯屋 御宿 かわせみ16	「八丁堀の湯屋」八丁堀の大黒湯へ行った嘉助は、和泉屋のおよねという女の子がいつも湯屋で稽古事の息抜きしているのを知ります。土用の桃の湯の日、深川本所方の松田庄三郎が女湯で殺されました。	文春文庫
76	雨月 御宿 かわせみ17	「雨月」五間堀の神保邸に菊見に行った帰り、東吾たちは長慶寺で兄を尋ねている男を見かけました。	文春文庫
77	秘曲 御宿 かわせみ18	「秘曲」るいは、七重に誘われ、鷺流宗家の演能に出かけます。鷺流宗家の広信は、先代より一子相伝の秘曲を受け継いではいませんでした。しかし、先代の隠し子が、秘曲を受け継いでいるといひます。「隠し子」の麻太郎が登場します。	文春文庫

78	かくれんぼ 御宿 かわせみ19	「かくれんぼ」るいやお千絵、七重や香苗は、茶会に出席することになり、東吾が子供たちの相手をするようになりました。源三郎の子・源太郎は、せっかく東吾と出かけられたのに、花世が東吾にまとわりつくのでがっかりです 「かくれんぼしましょう。おにはあなた」(花世)これとほぼ同じせりふを姪に言われたことがあったので、読んだ時思わずのけぞりました	文春文庫
79	お吉の茶碗 御宿 かわせみ20	「お吉の茶碗」大売り出しに敏感なお吉は、骨董屋の大売り出しで、いろいろな皿や鉢を一箱一両で買って来ました。	文春文庫
80	犬張子の謎 御宿 かわせみ21	「犬張子の謎」るいはお吉を連れて、猿若町の「青柳」で料理を食べ、その後東吾と待ち合わせの船宿に向かう途中、犬張子を求めました。後に、犬張子を作った職人の文治郎が、るいの買った犬張子を取り戻しに来ます。	文春文庫
81	清姫おりょう 御宿 かわせみ22	「清姫おりょう」東吾が雨宿りで飛び込んだ一軒家で、女の声が聞こえ、なにやらあやしげな気配に東吾は苦笑します。軒先へ出た東吾は長助と出会い、神田旅籠町での盗みの話を聞かされます。	文春文庫
82	源太郎の初恋 御宿 かわせみ23	「源太郎の初恋」東吾と一緒に富岡八幡に出かけた源太郎は、小文吾を連れて花世と会いました。その後、東吾たちと麻生家に行った源太郎でしたが、花世がいつもと違って元気がないのに気が付きました。	文春文庫
83	春の高瀬舟 御宿 かわせみ24	「春の高瀬舟」お吉が、古河屋が米の安売りの失敗をした話をしてしています。その古河屋で大旦那の市太郎が変死し、養子の輝之助に嫌疑がかかりまし	文春文庫
84	宝船まつり 御宿 かわせみ25	「宝船まつり」「かわせみ」に亀戸から小田原へ嫁入りしたおきのが泊まったのがきっかけで、東吾は源太郎と花世を連れて亀戸の宝船まつりに出かけることにします。そこで、幼い子供が行方不明になる事件がおきました。	文春文庫

85	長助の女房 御宿 かわせみ26	「長助の女房」長助がお上から表彰されることとなります。「かわせみ」や麻生家では、長助の女房のおえいに祝を贈ることを考えます。あるいは、祝いの席を遠慮したおえいが、なにやら寂しそうに見えました。その夜、おえいは、江戸払いになったはずの辰吉の姿を見かけます 長助の後妻であるおえいに焦点が当てられた作品です。	文春文庫
86	横浜慕情 御宿 かわせみ27	「横浜慕情」横浜の東吾たち一行は、浅間山に登ることにします。石段をのぼり、坂を上がって一息ついている時、源太郎と花世は首をくろうとした男を助けます。男は、東吾の知っているジョン水兵でした。ジョンは、美人局に引っかけたようでした。	文春文庫
87	佐助の牡丹 御宿 かわせみ28	「佐助の牡丹」富岡八幡の牡丹市へ出かけたるたちは、一位になった「白貴人」は自分が作った花に違いないと主張していた佐助という男を見かけます。翌日、佐助は訴えを起しました…。	文春文庫
88	初春弁才船 御宿 かわせみ29	「初春弁才船」新酒番船八艘のうち、七艘までは無事に江戸に到着しましたが、一艘がまだ着いていません。その最後の船の船頭・岩吉の息子の航吉を連れて、宗太郎が「かわせみ」に来ました。航吉は、東吾に西洋の船の知識を学ぶこととなります。	文春文庫
89	鬼女の花摘み 御宿 かわせみ30	「鬼女の花摘み」東吾が麻太郎と源太郎を連れて花火見物に出かけたとき、腹を空かせた幼い姉弟がいました。弟が、母を見つけてかけ寄ったとき、女の脇にいた男が、その子供を蹴飛ばしました…。	文春文庫
90	江戸の精霊流し 御宿 かわせみ31		文春文庫
91	十三歳の仲人 御宿 かわせみ32		文春文庫
92	小判商人 御宿 かわせみ33		文春文庫